

令和二年七月十日発行  
皇學館論叢第五十三卷第二号 抜刷

秦恒平「隱沼」論——近似と同化をめぐる——

永  
栄  
啓  
伸

皇學館論叢 第五十三卷第二号  
令和二年七月十日

## 秦恒平「隠沼」論——近似と同化をめぐる——

永 栄 啓 伸

### □ 要 旨

秦恒平の文学的主题は、深く沈んで〈貰い子〉に根差している。本稿では、他人のなかから真の身内を探そうと創り出された独自の身内観について改めて考察した。すなわち、世間から隔絶した密室の空間に愛の聖域を築こうとする身内観には、自己との近似をもとめる同性愛や近親相姦といった倒錯した愛が含まれる可能性が生じる。それはたとえば「平家物語」など古典への造詣の深さから生じてくる疑問や謎に基づいた、作者にとって気がかりな美貌の兄と妹の禁欲の愛である。この時期、「豆彩蝶文盤をあつかった「蝶の皿」やマジョリカの壺を取り上げた「隠沼」など、高名な美術品を通してこうした性的倒錯の主題を描こうとした跡がうかがえる点に注目し、また異母妹の龍子を愛してしまった兄文夫の自死、共謀するかのように後を追った龍子に、死なれた「私」についても検討した。

### □ キーワード

秦恒平 隠沼 異母兄妹 マジョリカの壺 身内論

## (1) 「畜生塚」の町子

秦恒平が独自の身内論をはっきり打ち出したのは「畜生塚」(新潮)昭和四五・二)であった。その原本となる『湖の本 131 原作・畜生塚 此の世 他』<sup>(注1)</sup>に「もらい子の境遇から自由になるために、肉親なるものを仮の約束ごと偶然の結ばれとして拒絶し、真実の身内を他人と呼ばれる人たちの中に見出そう、そう考えようと自分に強いた。父母未生以前本来孤独と思うことで自分を鍛錬した」とあって、後に削除されるこの一節から、貰い子という出自が作者に与えた影響の深さを知ることができる。そして貰い子という孤独な境遇に発し、親への不信を核に生成された身内観は、喪失したものを探す旅であり、具体的には、他人の中から真の身内を探そうという苦しい親探しの願望であった。同時にそれは理想の〈家〉についての希求でもあった。作品中「私」を慕いながら現実には十分な意思表示ができなかったことを「ばかやった、わたしはほんまにばかやった」と悔いつつ結婚して離れゆく町子に、「私」は父母未生以前の本来の自分という独自の世界を示すために手紙を書く。

本文の語句をつかって述べれば、人はみんな自分の家と家族をもっている。いつか人はその家へ帰り、家族(身内)と永劫一緒に過ごす。その家族とは親子同胞といった区別のない完全な家族である。人はその家を出てこの現実世界の混乱の中へ旅に出ている。今の生活はすべて旅さきの生活で、家庭は仮の宿である。いつか死ぬという手段である。本来の家(この本来という言葉はよくいう父母未生以前本来面目の本来の意味)へ戻り、本来の家族(身内)に逢う。みんなが何の隔意もなく愛し合う世界である。人はみんな自分の家に帰ってゆくが、愛に分割がないように、どの家にも同一の「私」が居て妻の迪子が居て町子が居る。人は現世で表面的な約束ごとで結ばれた家族、親子、同胞、夫婦や

友だちをもっているが、真実の家族は本来の家ではじめてわかる、と説くのである。しかし町子は気づいていた。いずれにせよその幻想には「現世での満足はなかった」ことを。

本稿で検討する「隠沼」のヒロイン龍子にも町子のこうした影が付きまとう。もともと「隠水の」（「海」昭和四八・五）のように「畜生塚」の発展形のかたちで、お互いに結婚後の関係を描いているものはあるが、ここではまず町子の描かれ方に注目したい。身内という愛の聖域を、言葉に替えようとするとき、作者は、「町子はさながら私を女にしたかと思うほど私の心にびったりはまり切っていた」女性で兄妹のように過ごした、と記す。さらに『原作・畜生塚』から削除された部分には「何のためらいも違和感も感じないで、なつかしいものに還ってゆく安らかさで惹かれ寄ったのも、町子にこそ私の人恋しさの一切が満足されるからであった。町子は私そのものかもしれないなかった。私以上に町子は私の在る姿をしていたのだ」と、さながら双生児のように融合可能な存在として描かれていた。

貫い子という境遇から血族である身内を信じられず、他人の中から真の身内を探そうとする文学的課題において、その対象はまずは自己に似た者、いや町子のように「私そのもの」を探す行為だったのだらう。血縁を拒否する心理には肉親への不信の裏打ちがあったと推測できるにしても、他者のなかに自分に似たものを探し愛すること、さらに対象が女性であることが多いとき、自己に似た他者を探すことは、ある意味で危険をとまなう発想であったにちがいない。つまりその思考の彼方には〈姉〉や〈母〉なる女性が見え隠れし、また愛するその女性が「私そのもの」であるなら、「私そのもの」を愛する「私」となり、相手の中の自己を愛することは同性愛にも近親相姦の構造にも近くからである。

濫澤龍彦は、ムジールやコクトーやサルトルやトーマス・マンなどの作品を例にあげながら、近親相姦について「それらの物語がことごとく、孤立した環境で展開されている」ことを指摘して次のように書いている。

その生まれや気質や肉体的特徴によって、互いに孤独を分かち合うことのできる二人の近親者は、それぞれ相手のなかに自分と似た者を発見し、これを愛するようになるのである。俗衆に対する反感が、いよいよ彼らのあいだの距離を近づける。

兄妹のように過ごした町子は「私」にとって、いかに親しく愛するにしても、近親相姦という世界を迂回するため、「結婚しない」「結婚を必要としない」という条件を要した。結婚しないという条件は、身内論を掲げた秦文学が当初から背負わなければならなかった大前提であり、その結果、作品中の愛する女性とは不倫という形態をとらないわけにいかなかった。家には愛する妻がいる、しかし肉体だけでなく魂でも結ばれた女性が、妻に知られず、妻の世界に何ひとつ触れることなく別の世界に存在するという危険で切実な空間の設定であった。それはユートピアとも言うべき、世間と隔絶した絵空事（夢）の世界であり、現実との二層構造ができあがる。その愛の時空は『罪はわが前に』<sup>(注3)</sup>では危うく接触しそうになり、妻との現実世界に亀裂が生じる危機が出来たように、絵空事の世界は、世間と隔絶した最小規模の（理想の家）を考えさせる問題であった。

では、なぜ不倫という肉体関係は許容しても婚姻関係は認めないのか。これは偏に血縁に直結するからであろう。「或る雲隠れ考」（「新潮」昭和四五・六）で千代に子どもを持たせなかったのも、阿以子に「私」の子を墮胎させるのも、汚れた血縁を残すことへの拒否であった。多くの作品で身内論はこうした制約をもっている。

## (2) 「蝶の皿」に見る近似性

身内論の心理的構造を考えると、血縁に関わる嫌厭や忌避が大きな比重を占めている。「私を女にしたかと思うほど」町子は「私の心にぴったりはまり切っていた」のは、もちろん精神上の男女の愛の近似である。いわば「もう一人の私」的存在である。私の半身、私の裏側、反転させた「私」、その心理的感覚的世界を身体的関係にまで幻想的に展開させたのが「蝶の皿」(「新潮」昭和四四・九)と言えようか。(注4)

もともとこの作品には、幻想の生成のために夢幻能に通じる時間のとらえ方がある。

すず様と仲良しの男の児だった静樹が女装をしているうちに「しづか様のおからだは、ま、何一つ不自由のない全くの女のものになっておりました」と語られる点からも、これはまず現実の話ではありえない。母の死を契機にすずの家に引き取られ姉妹として育てられた。すず様としづか様の愛は成長しても変わらず、人目を気にしたのか親は京都郊外の鹿ヶ谷に一軒の家を与えて住まわせた。やがてしづか様は病死、一年後の命日にすずも後を追うように自害する。それに関わったのが語り手「私」である。名高い骨董品の蝶の皿を入手した私は男性なのだが、女性へと変わりつつある。すずの訪問をうけ、その美しさに惹かれ、思わず女ことばになる。しづかの命日の夜すず様に招待され、情を交わしたあとすず様は予定の行動のように翌朝自死した。その後、目の前で話しているすず様は、実はしづか様ではないのかと不審を抱くところから内実が反転する。これは読み取れる、といった領域ではなく、作者自らの誘導にはかならない。すず様が事実しづか様なら、もと男性と「私」は関係をもったことになるが、しづか様はすずか様女性の身体になっていたとされる。

世間から隔絶して、いつの間にか鹿ヶ谷に女性ばかりの世界を創るのは作者の意図的操作である。「私」もいよいよ女性へと変貌していく。さらにすす様の亡霊が登場して話は混沌とする。この操作のねらいは、町子の場合のように性的合一を、結婚しないという前提によって回避するのではなく、むしろ積極的に推進した同性愛への漸近であり、そこでは性的差異は何も齎さず、内実がどう反転しようとも、ずっとしづかは互いに自分と同質の存在を求めた。「私」も女性へ同化したいとする化身願望がある。

この混沌とした近似の世界は、血縁という意味ではなんら懸念のない世界である。それだけでなく、性差のない混然たる始原の世界の提示であり、可視世界で障壁となる差別的対象を無化する方法でもあった。その点で、他人の中から真の身内を求める身内論とは、貰い子の苦境を悶々として暮らし、絶えず孤独と自己防衛を持ちながら、かぎりなく自己に近い存在を求めることで醸成された。それは理不尽な世間に対抗し、自己を開放するための思念でもあったけれども、「なつかしいものに還ってゆく安らかさ」を覚える存在や自己愛の対象を渴望したとすれば、広汎な意味では、同性愛も母子相姦をもふくまれるのではあるまいか。

先の洪沢は近親相姦を「相手のなかに自分の自己愛を投入し、しかもそれを自分の目で眺めることができるという、ユートピア的状况をつい想像」する、と述べている。身内論とはそれに似た世界の模索ではなかったかと思われるが、実際、血縁の問題になると、「私」は「或る雲隠れ考」に見られるような、閻婆鳥の「喚声を聴けば腸も碎け恐怖は三世に及んで消滅しない」「怪しい輪廻」のような悪夢に脅えなければならぬのである。

### (3) 隠沼（こもりぬ）について

「太陽」（昭和四八・三）に発表された「隠沼」も上記の条件を満たした作品に見える。陶磁器に取材した作品として、「蝶の皿」「青井戸」「隠沼」を集めた『湖の本5』<sup>(注5)</sup>があり、その「作品の後に」で「見られる通り今度の三作とも、海外の陶磁器に取材している。豆彩蝶文盤も青井戸もマジヨリカの壺も、知る人は知る、実在した名器ばかり。どの作のどの部分とはいわれないが、背景に実話や事実も生かされてある」と述べている。

モデルさがしをするわけではないけれども、まず詳細な年譜<sup>(注6)</sup>から、ヒロイン真葛龍子（まくず・りゅうこ）像の造型の過程を探ってみたい。

『罪はわが前に』で顕著なように、少年期青年期を通じて、梶川芳江への追慕の想いは格別に強いのだが、同様に、西村龍子も強く作者の心を惹いていたことが窺える。昭和三十六年十月、「母」が欲しいと恋いつつ梶川芳江と京都を想って休暇を手配す」と記す一方で、「午後、新門前に着き、叔母の稽古場で西村龍子の茶を喫す」や「西村龍子を、間において姉梶川芳江を夢見る」とある。また、翌昭和三十七年七月には、「ことに西村龍子の存在を「京都」の象徴のように新鮮に深く感じ、掛け替えない「根」を「京都」に確認して、同十八日、東京に帰る」との記述が見え、この時期、しばしば来信の様子を記している。

昭和三十八年一月には、「この日、西村龍子らと初釜用意。同七日、叔母の美緑会初釜のあと、社中で少女の頃から一等可愛くよく教えた西村龍子にドライブに誘われ、車中婚約を告げられる。婚約と茶名披露の茶会を手伝ってほしいと頼まれ、祝福し承諾」と書くが、内心は深い失意があったのだろう。この年、作者は二十七歳、龍子は二十二



歳の五歳下であった。同十月には「西村龍子来信、結婚式近づく」とあり、昭和三十九年七月には「永遠の少女像」として迪子とともに姉梶川芳江や西村龍子への思い強く動く」と記される。この頃、「畜生塚」が書き進められており、「或る雲隠れ考」も初稿はすでに成っていた。そうした当時の状況を考えると、「畜生塚」のプロットや町子には、西村龍子の面影が色濃く反映されていると思われる。もともと、昭和二十六年の年譜には「堀辰雄『風立ちぬ』や井伏鱒二の作品など、相変らずに多く借りて読んだ。貸してくれたもの静かな女生徒の行方も知れず名も忘れた（沢守和見?）」が、のちの創作の女の原型を成したように思う」と、いくつものモデルが存在することを明かしている。で、特定の名前に拘るのは危険かもしれない。

また、「原作・此の世」（初出は昭和三十九年十一月 私家版『畜生塚 此の世』<sup>(注7)</sup>）には、次のような一節がある。のちに『湖の本16 みごもりの湖下・此の世・少女』<sup>(注8)</sup>に収録されるとき、蒼子は純子に改変されるのだが、真葛という名が注目される。

去年の春、蒼子は婚約披露の茶会を真葛ヶ原で開いた。それはあらかた東京から私の指図どおりに用意された。当日は私たち夫婦も京都へ帰って、水屋仕舞の手助けをしたのだ。

一日中の点前にも蒼子は美しい限りの立居振舞を微塵もくずさず、私の汲んだ白湯を口にくんではくりかえし茶席へ立って行った。もう、その日が娘らしい蒼子の晴れすがたをみる最期だった。私は白湯の代わりに水で蒼子に飲ませ、飲みあまして蒼子が茶席へ入ったあと、その花野の永楽茶碗にひしと唇を当てた。

蒼子も知らぬはずの別れの水盃を、どうして蒼子は悟ったのか。

私は席を立ちかけた。「また手紙を書くからね」と言ったかもしれない。蒼子は片膝たてた方へ手の指ついた

恰好になって、につこり「恋文はあきませんえ」と言うなり勢いよく立った。蒼子のねばりのあるからだは私の腕の中で弓なりになり、私はふつくらした髪を下から支え、光に透けた泉へ顔をひたすように蒼子の唇に齒をあてた。輪郭のあかるい何かの花びらのように、つつましく蒼子の唇が私の唇を受けた。朝日を流して静まり凩いだ海の景色が、ふとみえた。一度はなれて、あらためて蒼子をはなやかに抱かれた。小さい木の実の種のようなものにも唇は触れた。(此の世)

茶室における蒼子(純子)の立ち振る舞いは、町子や龍子に通じる身体性をもっている。また、「真葛ヶ原」とは、京都知恩院の門前から円山公園一帯におよぶ地名の旧称らしい。

私家版の「あとがき」には「私小説ふうの拵えにはなっているが、詮索は無用である」と牽制しながら、「いづれにせよ、道徳の欠落者という主題にはまだまだ関心がある。業念とか業執という方へ退避しないで積極的に手づかみにしたい」と抱負も述べている。まだ不倫というはやり言葉がない時代である。道徳の欠落を、生まれもった人間の業に収斂させず、人間の営みに含まれる妖しい性のうごめき、悪へのまなざし、さらには不当な差別を生むエゴイズムにむけた鋭い視線を述べたものと理解される。

さて、作家の「私(宏)」はある文学賞受賞の祝いとして「極く近所友だちだった」真葛文夫からマジヨリカの壺をもらう。父の古美術商を継いだ彼がイタリアの土産として持ちかえったものである。その壺について次のような説明がある。

高さは三十センチそこそこ、鼓の胴を立てたような胴のくびれが自然で、きつぱり一度肩を張ってから姿佳く口づくりへ引き緊めてある。いきの佳い青年がきゅつとセーターの衿を立てた感じだ。逆に腰にはやわらかな輪郭がのこっている。ウルトラマリンの地色の中にひまわりがかった咲いていて、線も無造作、彩色も太い筆で一刷きしたように鮮やか。裏には花かざりをつけた月桂冠の若ものの顔がこれは満月のようにびんと張り切って描いてある。花かざりなど何気ない線を粗相に絡ませただけで、けれど浮き立つ黄金色が目にしみ、やわらかそうな髪には淡い緑色がかかっている。衿もとをVの字にあけてのどから頬へ額へ眼への透きとおった白さは、素朴といえは素朴だが、奇妙に、永遠なもののかたちを感じさせた。

この凛とした若者像が「永遠なもののかたち」を感じさせ、それが文夫に似ていると「私」は思うのだが、これですでに文夫の死を予測させる直感で、同じ感想を持つ人がもう一人いる。文夫の妹の龍子である。文夫と龍子は仲のよい兄妹だが、秦恒平の作品に共通するように、家族構成は複雑である。真葛莊市を父に持つ異母兄妹のだが、さらに奇妙なのは文夫の母と龍子の母は実際の姉妹である。そして一つ屋根の下で暮らしている。貰い子の「私」は子どものころ、この奇妙な家庭に遊びに行っても違和感を覚えず安らぎを得ていた。「分けへだてなしに「お母さん」と呼び合」う和やかさは、偏在するお母さんの世界であり、少年の「私」には理想の身内の世界と見えたのである。三人の関係がそういう空間から出発したことは留意すべきかもしれない。そこでは、龍子が文夫だけではなく「私」にも「お兄ちゃん」と呼びかけることも奇妙には感じられなかった。私にはその世界は「羨望に耐えなかった」という。「一族同居の和やかさははためにもうるわしく思えて」また「兄妹とは血を分けようが分けまいが、それより真実仲が良くてこそと思つて」いたのだった。だから、「私」は莊市と二人の姉妹の不思議な関係には特別な関心を抱

かない。「私が小説家らしい関心を向けるなら、何よりこの莊市氏になければならない、のに、私は固く苦しく乾か  
らびて行く老人と二人姉妹との想像を超えたロマンスは、一、二階通してハイカラに新装成った真葛商会の奥の塗籠  
に押し隠して忘れていたかった」と記す。大まかな事情は、二人から聞いた話や噂などで知りえたはずであるが、「私  
は真葛にも龍子にも親のことですばりと訊いてみたことがない」のだ。そこには血縁に関わる事情から身を遠ざけて  
いたいとする心理がはたらいたのかもしれないが、まず三人の世界を最重要としたのであろう。

物語は、龍子から「兄の形見にあのマジヨリカの壺をいただけないか」という手紙が届くところから始まる。文夫  
が死んだ事実から始まるので、文夫も気づいていたように、二人の関係はすでに文夫が想像する以上に早くから始まっ  
ていた。作者の関心は、下線部に読み取れる兄妹観である。血を分け合って仲が良い文夫と龍子に加えて「私」との、  
マジヨリカの壺をめぐる意識下の三角関係である。三年前、二十九歳に近くなり、「私」の子どもを欲しがっても、  
龍子は兄文夫はもちろん「私」にも「お兄ちゃん」と呼ぶのである。「隠沼」は題名の通り、隠された感情のうごめ  
きを描いた作品である以上、たとえば、文夫はなぜ自害したのか、また文夫と龍子の間に妖しい関係があったのか、  
なかったのか。「生まれて来たものの余儀ない根の哀しみ」を「私」に痛感させた事情とは何だったのか。読者はそ  
れらを慎重に読まねばならぬ仕儀となる。

#### (4) 文夫の照れ笑い

文夫は自殺する直前に「私」を誘って旅をしている。少年の頃から文夫は「勉強も良くして」「心映えは雨後の杉

の葉のように無垢」で「仔鹿のように柔軟」であった。その時は、突然上京して、二人は埼玉県飯野市の東雲亭(註9)とい  
う和風旅館に泊まった。

月の間という部屋に入ると、手すりの下が山ふところのまるい隠沼で、淀んだ水は錆びれてとろりと木蔭に沈んで  
いる。呼びかけて応える陽気さもないその沼の隠水の底ぐらさは、初めて家族と来た時から私には親しい何か  
だった。妻も娘もわあと覗いて怖そうな声をあげただけで事もなげな顔をしていたが、私には真葛龍子のいる世  
界はちようどこういう隠水の底のような気がしてならなかった。(中略)自分はひよつとして龍子を誤解してい  
るのかしれぬ、この隠水の淀んだ頼りなさ妙に和んだ静かさも、龍子がそうなのでなくて彼女をそう見たがつて  
いる自分の本性が映っているのかもしれない。私は、龍子の、自分の、という区別をその時ひどく嫌悪したのを覚  
えている。龍子は私に似ている。そう私は思いたかった。

ここにあるのは龍子に対する「私」の願望である。「妻も娘もわあと覗いて怖そうな声をあげ」るが所詮は無関心  
な「隠沼」の、「呼びかけて応える陽気さもないその沼の隠水の底ぐらさ」の中に龍子をもとめている。そして龍子を、  
現実の家族と対比する異質の空間、「隠水の淀んだ頼りなさ妙に和んだ静かさ」のなかに自分とともに住む存在と感  
じている。いうまでもなく、構造的に絵空事の空間である。もちろん「私」は自覚的で「龍子を誤解しているのかし  
れぬ」と疑いながら、それでも町子と同様に、「龍子は私に似ている」と願望を先行させる。上述の澁澤龍彦の論に  
照らせば、龍子のなかの(つまりは「私」のなかの)「私」を愛する自己愛の構図である。

文夫にこの隠沼を見せる「私」の行為はすこし露骨に見える。「私」と龍子の関係を暗に示しつつ、その事実を突

きつける「私」の意図を敏感に感じ取ったのか、丈夫はなるほど納得しながら「何だか当惑した照れ笑いを見せた」。納得してから、ふと露骨さに当惑して「照れ笑い」したのか心理の推移は不明だが、その奥底に丈夫の龍子に対する屈折した感情、つまり秘めた愛を照らし出す意味で重要である。その後、不自然なほどの飲みっぷりで酒に酔い、また自分から誘った卓球の玉を踏み潰すような行為には、明らかに龍子に関する「私」への憤慨がある。底辺にどこか腹立たしげで鬱積する憤怒が感じられる。そして「私」の小説の一節「今生のことはみな夢まぼろしと思せよ」を読んで胸をつかれたと、感慨深げに現世を悲観したかに言う。この世では結ばれない愛を来世でと願うような、運命的にどうにもならぬ恋を生きた文夫こそ絵空事の住人だったかもしれない。彼はそのまま京都に帰り、一週間後に自殺する。

自殺の直接の原因は何か。龍子によって語られる言葉から判断すれば、六月はじめに文夫は「大変な粗相」をした。「苦心してやっと手に入れた明の宣徳染付の魚文瓶、高さは四十センチ近いのを、抱きとった胸もとから声もろとも落として割った」という。しかしそれが原因ではない。以下の注目すべき事件がすぐあとに起こっている。文夫の死が七月はじめと記されているから、その事件があった後に、「私」を誘ったことになる。

その二、三日あとだった、龍子が夜中気はいで眼を醒ますと、ドアの傍に兄が立っていた。無いことだった。気分がわるいのかと、急いで半身を起こして声をかけたが兄は首を振るだけで呆やり龍子を見ていた。それからゆっくり一歩二歩近寄って来た。龍子は反射的に大声で「だめよ」と叫びガウンに手を伸ばした。兄はくるりと向き直ってとんと戸をしめて出て行った。

美しい異母兄妹は近親相姦の典型的な形態である。倒錯した愛が龍子に拒まれたこの夜から丈夫は失望し陽気さをうしなつていった。しかし龍子は言う、「だめよつて、そりゃ自分で吃驚したほどの声だった。吃驚したのは、でも、声が大きかったからじゃないの、何が、何故だめなのか、いいえ、だめじゃなくほんとはその時、あたし、文ちゃんもつと早く、もつと傍へ来て呉れたらと思つてたかもしれないの、それで吃驚して声も顫えてた。文ちゃんは可哀想、次の朝から龍子とも呼んでくれないの」。突然の出来事に動揺しながら、意識下で兄をもとめる龍子の震えるころを見る思いがする。<sup>(注10)</sup>

「真葛が美しい妹を女として愛したかもしれないこと」は予測されたけれど、龍子が兄にどれほどの愛を注いでいたかはこの一文が明かしている。語り手「私」が「龍子はもうずっと兄と一緒に紫野に住んでいた」と書くとき、こうした行為はこれまでもありえたかもしれないという想像に基づいている。兄と妹の相姦という「私」の妄想はさまざま高くまつていっただろう。そこに「私」が加わり三つ巴の愛欲の世界を作者は想像させる。丈夫はついに焼物に龍子の肌を思いながら、三十六歳まで独身を通した。そう言えは、焼物について作者は次のように書いている。

玉依姫とはたまゝ靈が依る、憑る、ところの女の総称にはかならず、靈が女のからだに憑るとは、女がからだを抱きしめている一つの壺のうちに憑るのでなくて何としよう。女の壺とは一種の靈界を秘めた自然から超自然に至る通路であった。その壺に象つたやきものを撫でさすつて愛しむ男たちは、かかる愛撫の感興を介して、さながら女体に憑る靈性の本質に自身を同化することが可能だった。かくて男は精気に満ちている間は生ま身の女体を求め、精気が衰えてのちは往々骨董のやきものを愛玩する。<sup>(注11)</sup>

近似性は同化への道程である。事件後、紫野で一夜を共にしたとき、その最中で龍子は何度も何度も「お兄ちゃん」と口にする。注意すべきは、兄丈夫と「私」の近似である。子どもの時から、普段でも、丈夫も「私」も「お兄ちゃん」と呼ばれることはあったようだが、愛を交わすときに叫ばれるのは、さすがに「真葛と龍子の間は結局どうだったのだろうと想像し」「強い嫉妬と共感を」を感じさせるのは至極、当然である。つまり「私」との愛は幻想の兄との愛でもあったことに気づくのだ。そして「彼が死んでぎりぎり守り抜いた何かが次第に輝く輪郭を眼の底に現わしはじめた時、それがあのマジヨリカの青年の顔に見えた」という。先に見たように、その顔は「のどから頬へ額へ眼への透きとおった白さは、素朴といえは素朴だが、奇妙に永遠なもののかたち」を感じさせるものであった。たとえば、それは龍子の「白いものが好き」という嗜好を強く思い出させる。「龍ちゃんの白好きは俺にはなまめかし

いが先で、別れてからも眼さきにちらついて困る」と「私」が困惑するのは、紫野の家で「文ちゃんと龍子は二階の十畳間を背中合わせの書棚で仕切って銘々の部屋をつくっていたが、二人で真似ているみたいにとっちへ入っても似た感じだった」という好みの近似を認識していたからである。だからマジヨリカの壺は龍子のために買って来たのだらうと「私」は思う。丈夫は自死することで妹への愛を永遠不動のものにしただけでなく、龍子に永遠の呪縛をかけたのだ。龍子が「先に死んじゃうなんて」「ずるいのよ」とつぶやくのは、呪縛をかけ、自分ひとりを残して先に逝ったことへの恨みごとにほかならない。愛した人がたまたま兄妹として生まれたという運命のめぐり合わせに、「生まれて来たものの余儀ない根の哀しみ」を覚えるのだ。後述のように、「根の哀しみ」にはもう一つの意味が含まれているのだが、ここでは生まれるとは無限から有限の世界への移行であり、それ自体が怨念であり悲しみであるという

(注12)  
作者特有の運命論があることを確認しておきたい。



## (5) 龍子の交換行為

それ故、死後五カ月たって（電話では九月末から、つまり二カ月半後から提案があったが）、マジヨリカの壺をいただけ  
ないか、という手紙は、当惑しながら納得されるものであった。むしろ二人の共謀にすら思えた。「龍子の懇願は死  
んだ真葛と口うらを合わせているような気がした」のである。この物語の軸はマジヨリカの壺の交換のストーリーに  
ある。

妻に対して「私」がどのような説得をしたかは不明である。いったん受賞のお祝いにともらった壺を、本人が死ん  
だから形見に返してくれというのは、いかにも奇妙な申し出である。「私」としては龍子の名前を出すことはできな  
いから、「葬式の日に頼まれた」という真葛家へ返す約束を強調するしかなかった。

仕事を兼ねて京都を訪れ、マジヨリカの壺を届けたとき、龍子はかわりに「深鉢」をもつてきた。それは文夫がか  
つて龍子に与えたもので、「口辺ですこしつぼんで胴から腰へちからづよく張った深みのある白地。その正面に素朴  
な黒で、愛らしい、いっそ尾をはねた鯉に似ている龍と水草のようなものが描いてある」ものだった。さらに、その  
時龍子が着ているのは「藍に白上りの印花の着物」で「帯は錆び色の紅朱、その紅朱の帯を一筋藍の帯締めで結んだ  
辺に黒い龍は愛嬌よくはね」ている。

この白磁の「深鉢」には、思いがけなく文夫の強い愛が表わされていて「どんな心地でこの鉢の白の肌や愛らしい  
黒い龍を彼の両掌に愛撫し愛玩していたかが想像されて来た」。すなわち「深鉢」は龍子そのものであり、マジヨリ  
カの壺は文夫そのものと見なしてよい。したがってこの交換は、「私」に深鉢、つまり龍子を与え、龍子には「マジヨ

リカの壺」、つまり文夫を渡す、文夫の遺志を継いだ龍子の思惑が込められている。だから「私」は東京に持って帰った深鉢が多くの人々の掌に触れられることに不快感を覚える。と同時に「龍子がマジョリカの壺を夜ごと抱いていると想」うと「死んだ真葛が妬まれた」のである。購入したのは文夫だが、この交換には龍子の意思が読み取れる。そして龍子の自死行為は「私」との訣別であり、文夫との同化を選ぶ決意を思わせる。

その晩、龍子と二人紫野の闇に溺れて一夜を明かした。龍子は何度も何度も「お兄ちゃん」と喚び、灯を消した暗やみの底にみごとに尾をはねる白い龍の幻を私は覗いた。濛々とけむるようなひしめきの中にいつか真葛の温かな息づかいもまじり合い、三人で挙げる祝祭の盃はきらきら光る琥珀の酒を闇の深みへ撒きちらしていた。

交換した日の紫野で過ごした一夜は、このように龍子と「私」だけでなく文夫の「息づかい」も加わって、さながら「三人で挙げる祝祭の盃」を実感させた。龍子をめぐる二人の男の構図は、かつての真葛莊市と二人の姉妹の異質な饗宴を彷彿させるけれど、作者はそこに秘められた倒錯とも言える愛と静かな嫉妬を、元来陶磁器に潜むエロチシズムに仮託しながら、溶かし込んでみせるのだ。そして最後に、マジョリカの壺を横に置いて自死するところに龍子の企みが見えてくる。つまり、「私」との肉体関係がはじまったところから、すでに兄文夫は龍子の幻想に参入していたのであり、兄妹は不可分の存在になっていたのではないか。そして文夫は死ぬことで「私」と一体化しようとしたのではないか。この、死んで生まれ変わるといふ発想は、のちに『四度の瀧』（昭和六〇・一 珠心書肆）の跋で、漱石の『「ころろ」にふれて、「とりかえしのつかぬ罪を背負った「先生」は、死んで「私」に化り変り、「妻」と「俱生俱死」の本望を生き直すのである』と記すところにも見受けられる。

末尾の龍子の死は唐突で、理由が釈然としない点もあるが、「兄を追った」と明記されているから、おそらく「真葛が最期に使ったという備前助清作の短剣」を使って、兄を追ったのだろう。運命的に叶わぬ恋に死んだ兄に応じた龍子の死は、やや図式的だが、死後の世界に達成される身内論の実践であるかに見える。結果的に、「私」は真葛兄妹に「死なれて」取り残されたのであるが、その現実には直面した「私」の醜い姿は次の一節によく表されている。

私は食事のあと急に龍子の鉢が抱きたくなり、手を伸ばして、錯ってふくら張った胴を指先でとんと突いてしまった。くるりとのどかな独楽のように柵の上で一回りして、身を投げて受けようとする私の目の前で白磁は床に傾き、落ちてぱくつと砕けた。妻は戸口に突っ立っていた。その表情はおびえて醜く、私は顔から血の気のひくのが分った。

スローモーションのように描かれるこの場面に、妻は今まで気づかなかった、のどかな日常のなかに潜む奇怪の出現におびえ、「私」は龍子との絵空事の世界の破綻を実感するのだ。そこには現実には西村龍子に去られた喪失感が影を落していると言ってよいかもしれない。二人に死なれ、絵空事の世界に拒まれた「私」の孤独は、『みごもりの湖』のヒロイン榎子に似た構図である。このように作者は絵空事を希求しつつ、それから拒まれる者たちを描いたのである。ところで、この物語には気になる一節がある。

以前「龍子のやつ、もう二つ年とてればよかったんだ、可哀想に」と微笑ったことがある真葛がその時そういう優しい眼をしていた。だが、龍子と私とが結婚できなかつたためぐり合わせを露骨に言っただけのけたのだった。龍

子も私もそこまで言われたくなかった。二人はもうからだでも結ばれて久しかった。

「もう二つ年取ってればよかった」とは何を意味するのか。「私」が結婚した当時は龍子はまだ少女であったという意味であろうか。また「結婚できなかつためぐり合わせ」を「露骨に」言っただけとどういうことだろうか。

年齢差は微妙に四つ、それは龍子とは「小学校のほかは一緒になったことがない」という記述と、「同じ大学の中で知り合った私の妻」との記述を照らしてみれば見えてくる。もちろん年齢差だけではないけれど、兄文夫とすれば、せめて大学生活を共にする機会があれば、と思ったのだろう。文夫は三十六歳で死ぬから「私」も生い立ちから考えて、同級生と思われるから龍子は現在三十二歳ということになるが、宮城の近くのホテルで文夫からマジョリカの壺をもらったのは、龍子があるところ「自分の子どもが欲しい、もう年齢的にも二十九は限度」と言っている点から、今から三、四年ほど前になる。そのホテルで龍子は、受賞の祝いを述べたあと「これからが大変ね」と言い「龍子の柔らかな顎から頬への白い線、きれいなまつげを窺うように見上げた。まつげを伝って涙が膝へ落ちた」場面がある。不意のなみだで戸惑うが、文章の流れとして、「一度真葛に結婚をすすめ、彼は言下に、「龍子が先」と答えた。龍子に言う」と「宏ちゃんが貰って下さるならね」と真直ぐ私を見た。ひやかすような微笑みが眩しかった」、から涙の場面、そして「妻との婚約を龍子に告げた日」のことから、子どもがほしいと言う龍子に移っていくとき、「私」は龍子を抱きながら「かすかな体臭が龍子の寂しさを一瞬想像させ」るのである。すでに自分の運命を予知するかのようになり、龍子の涙は寂しさに繋がっていることがわかる。

「畜生塚」の町子が末尾で「結婚したかったわ」と呻く声に似て、龍子は別れの涙を流したのであろうか。涙の意味を推測しながら、文夫の葬儀を照らすと、文夫は遺言で葬儀を紫野ではなく、あえて「生まれて育った所」「古門前

で行うように指示していた。自己の原点である出自の地に還ることで主張したいことがあったのだ。それが「私」に「何かを想像させる唯一の指示だった」と記される。想像させる内実は書かれていないが、この出自に関わる問題は、「生まれて来たものの余儀ない根の哀しみ」が示唆するもう一つの意味であろう。

秦恒平は自らの文学の三つの柱として、身内論と死生観と人間差別への追求をあげているが、この初期の短編にもすでに被差別者へのまなざしが宿っていることに改めて気づかされる。<sup>(注13)</sup>

## 注

注1 初出は昭和三十九年十一月 私家版『畜生塚 此の世』で、のち『湖(うみ)の本 131 原作・畜生塚 此の世 京の散策』(二〇一六・九)で復刻された。

注2 澁澤龍彦「近親相姦、鏡のなかの千年王国」(少女コレクション序説)一九八九・三 中公文庫 所収)。また同書に所収の「イノセント・わがユートピア」には「近親相姦の成立する世界は、日常の秩序から解き放たれた、時間の停止した、永遠の憧憬としての一つのユートピアにはかならなかったのである」という表現がある。

注3 秦恒平『罪はわが前に』(昭和五〇・九 筑摩書房)。拙論「秦恒平『罪はわが前に』論——聖域をめぐる物語」(『皇學館論叢』第五十一巻第二号 平成三〇・四)を参照ください。

注4 拙論「秦恒平『蝶の皿』——反転する物語」(『皇學館論叢』第五十二巻第五号 令和元年一〇月)を参照ください。

注5 『湖の本 5 蝶の皿・青井戸・隠沼(こもりぬ)』(一九八七・八)

注6 『湖の本 52 自筆年譜(一)』(二〇〇九・三)

注7 注1と同じ。ただ「此の世 処女作」として収録された『秦恒平選集 第三二巻』(二〇二〇・三)では、ヒロインの名前が馥子となっている。初出の私家版は未確認だが、「湖の本16・みごもりの湖下・少女」(一九九〇・八)では純子、「湖の本

131・原作・畜生塚 此の世 京の散策(二〇一六・九)での蒼子、そして『選集』での馥子と、復刻公開にともなう変更は注目されてよいだろう。

注8 『湖の本 16 みごもりの湖下』(一九九〇・八)に付録として「此の世」と「少女」が収載されている。

注9 東雲亭は、年譜(注6)によれば、昭和三十六年七月に「母もともに一家飯能「東雲亭」に一泊憩う」とあり、また昭和三十八年十月にも訪れている。

注10 『湖の本 147 花方 異本平家』(二〇一九・一一)に次のような一節がある。「宗盛にはいわば戸籍上の「実妹」にあたるあの建礼門院徳子に、一門があげて外戚の栄を、皇子出産をと渴望しつつ、容易に果たせなかつた頃に、策に趨る母時は宗盛に命じて、徳子の閨に偲び入らせていたという。どう渴望しても高倉天皇に健康な子胤が望めそうになかつたからと「異本」たちは口をそろえ、たとえ「取換子」宗盛に妹徳子を抱かせても、「同父母の血」の交わりでないことを少なくとも母時子だけは識っていた」。真偽のほどは不明だが、作者がこうした〈血〉の交わりに殊に深い関心をよせていたことは見逃せない。

注11 「女の壺」(『藝術新潮』昭和五一・九)、のち『顔と首』(昭和五三・一二 小沢書店 所収、『湖の本 138 美の深窓・美の散歩』(二〇一八・二))

注12 「怨念論」(『婦人公論』昭和四五・九)。「湖の本 エッセイ2 花と風・隠国・翳の庭」(一九九〇・三 所収)には、「人はみな生ま・れたことへの根源的な悔いを背負って生きる。悔いの受け方でその後の生き方が変わるし、また生まれる前、生まれぬ以前への根源的な「愛」に捉えられる。生まれる前、未生以前本来の面目へのこの強い愛は、生ま・れた悔いおよび無力感と表裏一体になって、自分を生んだ「陰」に対する本質的な「怨念」となるのである」と述べられている。

注13 「私語の刻」(『湖の本 エッセイ19 中世と中世人(二)』(一九九八・八))

(ながえ ひろのぶ・近代文学研究家)